

源流の四季

第34号(2009年7月)夏



Summer

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057
<http://www.tamagawagenryu.net>
E-mail: genryu@ec3.technowave.ne.jp
発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流協議会(甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会
印刷/(株)サンニチ印刷



新緑の雄滝(山梨県小菅村 撮影 中村文明)

Contents 目次

源流元気再生プロジェクト運営委員会.....	2
源流大学が苗を育て2年目に挑戦.....	4
源流から河口まで国の直轄区間へ運動開始.....	5
みなかみ町、川上村、根羽村が新たに加盟.....	5
源流研究所運営委員会開催.....	5
第31回多摩川流域セミナーを開催.....	6
源流から河口までの市民連携・流域連携を図る.....	6
第10回全国源流シンポジウム案内.....	7
「最初の一滴」に会いに行きませんか.....	7
日本エコミュージアム研究会案内.....	8

源流元気再生プロジェクト運営委員会

「下流域との人的・資金的な連携の 強固な枠組み構築へ」

小菅村・源流研究所は、継続が確定した源流元気再生プロジェクト運営委員会を、六月十一日、小菅村役場二階会議室で開催。下流域との人的・資金的な連携の強固な連携の枠組みを構築し、持続可能な小菅村の発展の基盤を確立する方針を確認して、「アドバイザー」から新しい視点に基づくコメントをいただいて、「どこよりも元気な循環型の小菅村を創造する」との目標に向かって活動することを確認した。

佐藤源流振興課長の司会進行で進められた運営委員会では、始めに新しく運営委員になった十名に委嘱状が交付された後、降矢英昭村長と小泉守運営委員会会長、国土交通省京浜



平成21年度源流元気再生PJ運営委員会（6月11日）



プロジェクト運営委員会
小泉 守 会長



降矢 英昭 村長



国土交通省
京浜河川事務所
山口 充弘 副所長



NPO法人
樹木・環境ネットワーク
洪沢 寿一 理事長



各研究室の室長が報告



源流地域を直轄に
編入したい

河川事務所の山口充弘副所長がそれぞれ挨拶した。降矢村長は「本日は、アドバイザーの高橋裕先生、宮林茂幸先生、洪沢寿一先生、鏑山英次先生、山道省三先生、神谷博先生、伊藤徹先生には大変お忙しい中、ご参加いただき心より感謝を申し上げます。昨年度の源流再生の取組みが評価され今年度の継続が認められました。本日の運営委員会が、小菅村の今後の進むべき道を指し示す有意義な会議になりました。ますます期待します」と参加者を激励した。

運営委員会の小泉守会長は、「東大北海道演習林に勤務したドロガメさんの本を読んだら面白いことが書かれていた。訪問先の森の感想を聞かれ

たとき『暗い』といったら理由を聞かれたそうで『明るくない森だ』と答えたという。人の手の入らない森を憂えてのことだが、今山に道を入れること、間伐することが必要になっている。道を付けなければ山は守れない。今年度の源流再生では、持続的継続的な活動を目指すこと、一時的なイベントに終わらせないことが大切。素晴らしいアドバイザーの胸に飛び込んで新しい道を探ろう」と発言した。続いて京浜河川事務所の山口充弘副所長が「私たちも源流を重視して源流地域を直轄に編入したいと国に予算要望している。五年前に国土施策開発調査に拘わり、小菅村に何度も足を運んだ。当時色々議論したことが源流大学として実現するなど大きな変化が表れている。私もこの源流元氣再生事業に積極的に熱心に関わりたい」と参加者を励ました。

多摩川源流研究所の中村所長をコーディネーター役に開始された運営委員会では、最初にNPO法人樹木・環

境ネットワークの洪沢寿一理事長が「源流を活かした村づくりへの提言」を行った。

五十年後の小菅村を 考えよう

洪沢理事長は、「ドロガメ先生の話があったが、どの木を伐つてどの木を残すのかを判断する際、いつも百年後、二百年後の森がどうなるかを考えていた。一番大事なことは、人間は木の実や野菜や果物、肉や魚を食べて生きていく。人間は植物や動物に依存し寄生していた。森の中で太陽をどう平等に当たるようにするか。太陽が隅々まで当たれば動物や植物が生長し、生き物がいっぱいになる。太陽の光の分配に心を配り元氣な森を造ること、これがドロガメ先生の考え方だった。いい森を造るには百年、二百年かかる。五十年後の小菅を考えると一年にしよう。

今世界中で石油に依存した生活になっているが、物質文明の生活はもう限界になっている。自分たちの命がどこに繋がっているのかを考えることが大切である。森は、百年、二百年かけて育てられる。明るい森は、枝を伸ばし幹を太らせ成長する。森が成長することは、CO2を吸収固定化することである。山村再生支援センターにおいてこれをクレジット化する制度を広めていきたい。こうした取組みを進め、生業にしてこの地域を次の世代に繋いで欲しい」と村づくりの課題と方向を分かりやすく提言した。



大きな源流
プラットホーム育て

「平成二十一年度の源流元氣再生事業の課題」の報告に立った佐藤英敏源流振興課長は、「今年度の目標が下流域との人的・資金的な連携の強固な枠組みの整備にある。この運営委員会を流域の多様なセクターが参加連携する大きな源流プラットホームに育て、これを基盤にNPO法人「源流こすげ」を設立し元氣再生事業を持続的に担える組織を確立したい。具体的な課題としては、

- ① 源流プラットホームと「源流元氣ラボ」の設置
- ② 「源流資源の循環・活用・交流プロジェクト」
- ③ 「源流・森林再生プロジェクト」
- ④ 「源流ライセンス・源流ミュージアムプロジェクト」

の四つが柱であり、この課題を実現するために「木づかい研究室」「産業開発研究室」「健康づくり研究室」「森林再生研究室」「文化再生研究室」を設けたい。それぞれ別々に活動するのではなく、お互いに連携を取り合い総合的な活動を展開したい」と今年度の課題と運営体制を報告した。

提言と課題報告を受けて、「木づかい研究室」（古屋金男室長）、「源流産業開発研究室」（亀井雄次室長）、「健康づくり研究室」（守重広子室長）、「森林再生研究室」（木下栄行室長）、「源流文化研究室」（松木直美研究室事務局長）から、研究室の昨年度の成果と今年の抱負が生き生きと語られた。

各研究室の報告を受けて、アドバイザーから 貴重なコメントをいただいた

「下流域との繋がりが かかせない」(宮林茂幸先生)

この元気再生
事業は、皆さんが
アイデアを出し、
修正しながら進
めていくことが
重要だ。



大きな課題として下流域との繋が

りをどう大きく捉えていくか。これは
経済産業省、内閣府なども気にされ
ていると思う。これから自立してい
くには下流域からの大きな支援が
必要だ。支援活動の中心は環境だ

実には私たちがCO2を年間三百
出している。それを木材に固めるため
には、電柱ぐらいの大きさの木が二十
三本いり、計算すると六百円ぐらいか
かる。下流域のファンをいばい作って、
「特別村民にしますから、その代わり
税金を六百円出して下さい。それを
森林整備に使って皆さんのCO2を二
トータルにしましょう」と打つて出る。

そういつたものを長期的なビジョン
の中にはめこんでいくというような構
造が必要になってくる。それぞれの研
究室はもう一回長期的な視点を入れ
込んで、五十年先の文化・産業はどう
なっているのか、そういったものを検討し、
売りだすリストを磨き上げていくとい
うことが大事だ。

「小菅村が随分変わって きたという実感」

(神谷 博さん)
木使い研究室ですが、看板を是非

と言っていたらも
うやってるとい
う報告を聞いてび
くり。だんだん
小菅らしい看板
が増えていくと、それだけでも景観が
変わってくる。



産業開発研究室のわさびのメニュー
開発を、今年も一緒にやれたらいいな
と思っている。

それがCの健康作り研究室の話に
も繋がってくると思うんだが、食事は、
最初に来た頃に比べておいしくなっ
てきた。食に関しては、永続的な農業、
安全な食、そういうことに関心
が高くなってきているので、今やってい
ることは決して間違っていない。

森林再生研究室ですが、ある所で
小菅の紹介をしたときに、すぐに調べ
て大橋式路網がちゃんと出てました
と言われて、随分広まっているなあと
実感しました。カーボンオフセットの問
題は最先端の課題ですので、頑張れば
先に繋がると思っています。それから文化
再生研究室ですが、小菅自体がとて
もロマン溢れる所なんだと思ってる。

玉川上水を教材にする話だが、今の
悲惨な玉川上水を辿っていくと、この
源流まで帰ってくる。そんなロマンが展
開できたら、時空を越えて面白いストー
リーができるんじゃないかと思っている。

「追跡調査で重要な キーワードが提示できる」

(山道省二代表)
小菅の源流資源リストは作ってお
れるのでしょうか。小菅ならではの資

源というか、その
発見が一つは魅力
的な商品に繋がっ
ていくのかなとい
う気がする。



腰板に關しても、
出来上がった物を子どもたちがどう
感じるかとか、健康の問題とか、その
辺りをちゃんと追跡調査をすべきで
はないかと思う。ある意味、次の販売
のチラシを作るとき、極めて重要な
キーワードが提示できる。材木を使う
ことによつて室内の空気の環境がど
うなのか、人に与える心理的なものは
どうなのかなど、もう一つの、健康作り研
究室と連携をすると大いに良いと思
う。

五つの研究室は互いに情報を交換
しながら複合的なアイデア商品が出て
くる可能性が大いにあるので、横の連
携はやつた方がいいのかなと思う。
それと産業開発の方ではもう少し
多様な商品を試作して広げて頂けれ
と比較が出来るという気もした。

整理すると、文化再生で幾つか調
査されていたが、これが体何に結び
ついていくのか。ビジネスでも、商品でも
観光の目玉でも構わない。戦略のフレ
ームを作つて考えておいた方がよい。

「川に自由を与えてほしい」

(鰐山英次先生)



小菅村の観光
パンフは大変クオ
リティーの高いパ
ンフだと思ふ。い
い映像というのは、
撮るものが全て
分かつてない。これは中にある
人達が作ったパンフだということが伝
わってくる。

三つ子山という山に登ると、眼下に

小菅集落が全て見えて、谷間の居住が一
望に見える。ここに生きる人達はいつべ
んはこへ行つて、集落を見て欲しい。そ
うすると集落に対する見方、考え方が
変わってくるんじゃないか。

橋立に行くところ、山の手で急に斜
面が広がります。これはすごい風
土観をもつた風景がここに展開されて
いるなと感じました。

今日、小菅に来てみると、田元橋のと
ころではという思いが一つあった。今ま
で小菅川はどんな原型だったのか、小菅
川はいつでも直線を追ってきた。今日は
心なしか若干、蛇行していたようだった。
なんか川が里帰りしたような風景。少
し小菅川は自然な川に戻つたなという
印象を強くした。もし管理が許される
ならば、川は決して真つ直ぐじゃない。
多少の自由を川に与えてやつてほしい
なとそんな思いがしました。

「思いを持ち続けないと 実現しない」

(伊藤淑虫プロ社長)



一つの感想は、
我々がアニメーシ
ンを作るとき、
絵を描く人、色
を付ける人、背
景を描く人、撮
影をする人がいます。今、研究室は
ABCDEと五つありますけど、いろ
んなセクションが並行して動いていくと
いう、その下で村が活性化されていると
いうところがアニメーション作りとちよ
と似ていると思いました。

映画を作るということについて言え
ば、必ず作るという思いを持ち続けて
いかないと実現しないものです。そう
いう意味ではこの中村さんと僕はもつと
昔、お酒を飲む機会があつてその時初
めて会つて、この間台湾に行くときまで
会つてなかつたんです。パツとお互い顔を

見ただけで思い出したみたいで、いきな
りその話が出てきたんで、やっぱり中村
さんってすごい人だなと思つてます。そ
ういう提案は、最初は思いつきからい
ろんなことが始まると思うんです。玉川
上水のアニメが実現するまで私は皆さ
んにくつついて歩いて、必ずどこかで完
成できるように続けていきたいと思つて
います。

「下流にPRする 巨大集団がある」

(高橋 裕先生)



今日は大変い
い話がいっぱいあ
りました。五つ
報告があつて、あ
の中で何が小菅
村にとつてPR

効果があるかを決めることが大切で
多摩川流域というのは日本で一番人
口が多い。小菅村の立場に立てば、PR
する巨大集団がある。それを黙つてお
く手はないです。まず、この五つの中
でどれが小菅村を売つて出るのにいい
商品かということを選んでいく。五つ平
等にやろうとしたら共倒れになります
から、これはどういうのを下流に売り込
むことです。

今、全国の水源地の村はほとんど人
口が減っています。

水源地の再生ですから、ちよつとし
た知恵ぐらいじゃできないんです。村
民を挙げてこの小菅村をサポートする
人達を二人でも大勢増やしていく。村
民自身が小菅村を愛していることは
間違いない。それを下流の人達に分かつ
てもらい、水源地が荒れたら自分たち
が大変になるぞと思つていただく。た
だそういうと抽象的でなかなか理解し
ていただけないので、具体的な手を打つ
ということが重要です。

源流大学が苗を育て一年目に挑戦

児童・保護者・先生・村民が一緒に田植え

昨年三十五年ぶりに守重文俊さんの田んぼで田植えを復活した源流大学の小林徹行君、中村淳美さんグループは、源流大学現地事務局の石坂真悟事務局員の援助を受けながら、今年は田起こし、苗育て、水路の整備、イモチ病対策など意欲的な企画に基づき、六月十日、長作地区で田植えを行った。

田植えには、小菅小学校の五年生が総合学習で田植えに取組むなど当日も多くの児童と保護者、先生、村民が参加し、賑やかで元気な田植えになった。東京農業大学の大澤学長や小菅村の降矢村長も参加し参加者を激励した。参加した源流大学生の感想は次の通り。



小林 徹行君

去年は苗を自分たちで作れなかったの、今年はカルガモの対策をしながら

去年は苗

だいたいと思つてやり始めた。去年はイモチ病にやられて収穫できなかったの、今年は改善していきたいと思つています。でも農薬や消毒はしたくないので今年は少し工夫して、病気が発生しなければうれいんですが。



鈴木 恵子さん

この風景の中で田んぼがあるのは珍しいというか、普通ならそこにあるのに山の中にあるというのはいすく癒されるという気分がすごいです。子供達が一緒に植えてくれたので楽しかった。同じに学科の友だちも来たといつているので小菅に連れてきた。

私は帝京科学大から参加しています。農大の友達から誘ってもらって参加しました。もともと隣の西原の人達とは仲良くさせてもらってたんですが、今回の取り組みで小菅の人達と交流を深められていい経験ができたと思います。子供達の表情は生き生きとして、小さいうちからこんな経験できるのはうらやましい。



根本 由子さん

私は帝京科学大から参加しています。農大の友達から誘ってもらって参加しました。もともと隣の西原の人達とは仲良くさせてもらってたんですが、今回の取り組みで小菅の人達と交流を深められていい経験ができたと思います。子供達の表情は生き生きとして、小さいうちからこんな経験できるのはうらやましい。



親子で田植え(6月10日)



山崎 広樹君

今まで以上に盛り上がり、子供達の笑顔を見て楽しかった。踊りも楽しかった。自分が住んでいるところでは子供達が泥をになつて遊んでいる姿をあまり見ないから自分も子どもになつたみたい楽しかった。



折出 侑君

去年は密に植えすぎたせいで病気が出ちゃつて収量が半分減つちゃつたけど、今回はちゃんと企画して、植える間隔を広げたり、植える数を少なくしたりして風通しが良くなるようにして病気がでないようにした。台風が来ないことを祈りたい気持ちです。



千井野 聡君

小菅も田植えも初めて。裸足で入って、田んぼの柔らかさを初めて知った。不耕起の田は堅くて、田植えもやっただけですが堅くて入らなかった。これがどう違うかとして出てくるかそれが楽しみです。



佐藤 孟紀君

田植えは小さい頃自然教室でやったこととはあったんですが土の感じが気持ちよかったです。収穫が楽しみです。子供達はうれしそうで、子どもと自分たちの感性はちがうなと思った。



福田 恵さん

小菅での田植えは初めて。小さい子から大人までみんなで楽しくできた。泥はむにむむにゆつて柔らかかった。オタマジャクシとか蛙とか前日に生き物採りをして楽しんだ。



田代 実さん

田植えは小さい頃にはやったと思うんですが、記憶がなくて新鮮でした。土の感触は、最初はワツと思つたんですが、だんだん慣れてきて気持ちいいなと思つきました。



阿部 咲子さん

私は新潟出身なので田植えは小学校の授業で経験したことがあつて、それで逆うことで、今もお米は食べているけど田んぼは知らない子供達が多かつたと思うので、教えてあげられて良かった。子供達はすごいエネルギーで押された感じがしました。

若干昔植えた時よりも稲が小さいなと思つて収穫の不安があります。もしかしたら小菅産のお米なので強いのかと思います。源流エコツアーに行つて面白かったです。また行きたいなと思います。



品田 朝美さん

田植えは初めて。今回はビデオを撮つたりして、子供達が楽しかったと答えてくれたりみんなが一生懸命子供達と遊んでいるのを見て、カメラに携われて良かったと思つた。



霜田 紗江さん

今年は病気を克服して少しでもいいお米ができればいいなと思つています。私は食事の方をやつていたので子供達と遊べなかつたんですが、行ったら、大人も子どももいっしょに来ていて楽しそうだった。昨日ちょっと田植えをして、その時に去年と今年はちがうなと思つた。



中村 淳美さん

なにより田んぼがみんなの心をつなげるシンボルみたいになつてうれい。この間小学生の子と田植えをしたんです。その子たちが学校に帰つて、田んぼが楽しいとつてくれて今年は結構小学生が多かつたし、先生や保護者の方に広げてくれてすごうれしかったです。

今回は、耕した田んぼとそのまの田んぼと二つにわけた。入つてみても水温が全然違うのがわかるくらい温度が変わつてきたのでこれでいけばなんとか病気がなくなるのかなと思つています。不安もあるんですが、違うやり方でも今回実験的に出来たので、全部勉強です。



三平 祐樹君

昨年と比べ、学校や村民との繋がりが深まり、嬉しかった。子どもたちが生き物を追いかけて、田植えをしたりとこのびとと遊んでいる姿が印象に残つた。今年はたくさん笑つてほしい。

源流から河口まで国の直轄区間へ運動開始

源流協議会が総会

甲州市(田邊篤市長、奥多摩町(河村文夫町長)、丹波山村(岡部政幸村長)、小菅村(降矢英昭村長)の四市町村で構成する多摩川源流協議会の平成二十一年度総会が、五月二十七日、甲州市勝沼防災センターで開催された。当日は、甲州市の田邊市長、奥多摩町の加藤企画財政課長、丹波山村の坂本副村長、小菅村の降矢村長が出席した。

総会では、田邊会長が「源流協議会は設立の目的である源流域の自然環境の保全と源流域の活性化に資するため、国や県への要望、シカの被害の現状を把握するための実態調査、個体保存や母樹の保護などの食害対策などに取り組んできた。今年度は、多摩川の国の直轄区間の源流域までの見直し、国土交通省京



多摩川源流協議会平成21年度総会(5月27日)

浜河川事務所奥多摩出張所の設置や上下流連携強化に取り組むたい」と挨拶した。続いて、事務局を担当する源流研究所の中村所長が、大菩薩から三窪高原にかけてシカの深刻な食害が拡大していること、特に三窪高原のレンゲツツジは壊滅的な被害を受けており、大菩薩峠付近の残

された僅かな群生地での保護が急務であり、地元大菩薩観光協会と連携してシカ柵設置に取り組む方針と、さらに二級河川である多摩川の国の直轄区間の見直しについて説明し、源流から河口まで直接国が管理するよう粘り強く国へ働きかけていく方針を提案し総会で承認された。

みなかみ町、川上村、根羽村が新たに加盟 全国源流の郷協議会が総会

全国源流の郷協議会は、五月二十日、東京都千代田区の都道府県会館で平成二十一年度の定期総会を開催した。総会には、国土交通省河川局河川環境課の勢田調整官、環境省自然環境局計画課の平野課長補佐が出席し挨拶した。今年度、利根川のみなかみ町、奈良県の川上村、長野県の根羽村が新たに加入し、念願の二桁である十一の自治体を会員に持つ全国源流の郷協議会へ成長した。当日は、五ヶ瀬川源流の五ヶ瀬町、旭川源流の新庄村、熊野川源流の天川村、紀ノ川吉野川源流の川上村、木曾川源流の木祖村、千曲川源流の川上村、相模川源流の道志村、多摩川源流の小菅村、利根川源流のみなかみ町の代表が出席した。耳川源流の椎葉村、矢作川源流の根羽村は所用のため

参加できなかった。

総会では、降矢会長が「源流の郷として安定した生活が持続できるようにしたい」との思いから、全国の源流域の自治体に参加して、平成十七年十二月に「全国源流の郷協議会」が設立されて三年半が経過した。この間、「源流再生政策委員会」開催による国への政策提言、大橋式路網を核とする森林作業道の研究と普及、NPO法人全国源流ネットワークとの協働による全国源流シンポジウムの開催など、国民に対して源流の重要性をアピールし、源流への理解と協力を広げてきた。今年度は、源流再生に関する政策を実現するために「源流再生国政懇談会」を設置すること、また、第十回全国源流シンポジウムを成功させること、森林の管理と経

営の基盤である森林作業道の研究と普及を進めていくことなどが課題



全国源流の郷協議会が総会を開催

源流研究所運営委員会開催

多摩川源流研究所の平成二十一年度運営委員会が、四月十二日、小菅村役場で開催され、平成二十一年度事業計画や予算を審議し決定した。今年度は源流元気再生事業や大橋式路網の開設を柱とする森林再生プロジェクトなどの課題に取り組むことを確認した。

はじめに降矢英昭村長が「運営委員の皆様の日頃からのご尽力に心から敬意と感謝を申し上げます。源流研究所は、小菅村において源流を活かした村づくりの中核を担い、重要な役割を果たしてきた。今後とも皆様方のご協力とご支援をお願いしたい」と挨拶、引き続き宮林茂幸運営委員長が「小菅村と源流研究所が協働で全国のモデルになる源流再生事

である。源流は、流域の要であり、国土保全・環境保全の最前線であると自覚し、この源流の郷ネットワークの輪を今後とも拡大していきたいと決意している」と挨拶した。

事務局から平成二十一年度の事業報告、決算報告、さらに平成二十一年度の事業計画、同収支予算が提案され承認された。

全国源流の郷協議会の役員は次の通り

会長 降矢英昭小菅村長(山梨)
副会長 飯千辰巳五ヶ瀬町長(宮崎)
副会長 栗屋徳也木祖村長(長野)

業を作り上げてきている。源流元気再生プロジェクトでも大きな成果を上げてきた」と挨拶した。

運営委員会では、佐藤英敏事務局長が平成二十一年度の事業報告と決算報告を、中村文明所長が平成二十一年度事業計画と予算をそれぞれ報告提案した。

今年度の重点課題

- ① 源流元気再生プロジェクトについて
- ② 情報の発信、「源流の四季」の発行について
- ③ 源流体験を中心とする上下流交流について
- ④ 源流大学・エコミュージアム全国大会への協力について
- ⑤ 源流ネットワークの形成について

第三十二回多摩川流域セミナーを開催

野川の湧水・崖線など魅力を堪能

多摩川流域懇談会(高橋裕会長)の主催による第三十二回多摩川流域セミナーが、六月二十日多摩川の支流である野川で開催された。今年度は、流域懇談会の目標として多摩川の源流から河口までの市民が連携を深め、流域連携・市民連携を深める中で流域の自然環境を保全する活動を盛り上げていくこと

を課題としており、その第一歩として野川に集う市民との交流が行われた。

流域の支川の中でも野川は昔から市民による活動が盛んな川で、自然再生活動や、湧水の保全、水辺の整備など野川に集う市民の活動について現地で交流した。参加者は、武蔵野公園や野川公園の空間と国分寺崖線のあちこちから湧き出る湧水や蜚川の整備など野川の魅力を存分に堪能した。

参加者の感想

先ず企画してご案内下さったスタッフの皆さんに感謝。東京の中によくぞこれだけ保存のよい自然が残されていた、というのが第一の感想です。野川流域の市民の皆さんの熱心な働きかけと息の長い支援がこの様な素晴らしい宝ものを残させたと思

源流から河口までの市民連携・流域連携を図る

多摩川流域ネットワークが総会

源流から河口までの市民が参加・連携する多摩川流域ネットワークの総会が、五月十八日、川崎市多摩区の二ヶ領せせらぎ館で開催され、平成二十年度の事業報告・収支報告、平成二十一年度の事業計画・予算をそれぞれ確認した。

長島保代表は「多摩川流域ネットワーク(TBネット)は平成十六年の結成以来、様々な活動を展開してきたが、今後どのように会を運営したらいいか、今節目の時期にきている。この会をどのように発展させたらいいか大いに議論して欲しい」と挨拶した。総会では、TBネットの設立の原点に立ち戻り市民の連携を強め、団体の連携・各拠点訪問と情

います。今日は、実りのある一日を有り難うございました。



現地で案内する堀井さん

報交換・交流を推進することになった。さらにTBネットが流域連携の牽引車の役割が果たせるよう、河口の大師河原干潟館から大田区のリ資料館、二ヶ領せせらぎ館、府中ふれあい教室、福生の川の志民館、日野のカワセミ館、源流研究所などの拠点の交流・連携を積極的に図り、情報のネットワーク化や情報の共有化をすすめることを確認した。

総会で新しく選出された役員は次の通り

代表 中村 文明
副代表 神谷 博 安元 順
事務局 鈴木真智子
会計 長谷山明子
監査 北島 信夫
石田 幸彦

財務省川嶋主計官 小菅村現地視察

財務省の川嶋主計官、内閣府の石塚参事官など八名は、五月二十五日、地方の元気再生事業の執行調査で、首都圏において自治体主体的地域作りに取り組んでいる事例として、小菅村の取り組みを視察するため現地を訪れた。

川嶋主計官一行は、小菅村の佐藤源流振興課長、多摩川源流研究所の中村所長らの案内で、鶴峠の大橋式林内路網づくり、白沢地区の多摩川源流大学、小菅小学校の木づかい保健室プロジェクトなどを視察し、午後三時から、降矢小菅村長、小泉元気再生運営委員会会長らと意見交換を行い、源流再生プロジェクトの取り組み内容を詳しく聴取、国の元気再生事業を源流再生に役立てて欲しいと激励した。



第31回多摩川流域セミナー(6月20日)

当日は、午前九時三十分に武蔵小金井駅に集合し、東京都地元の案内人のガイドで丸山橋から、武蔵野公園、野川公園沿いに点在する湧水や自然再生に取り組み調整池、蜚川などを巡り、午後からは、ボイスカウト日本連盟会館において参加者によるフリートークが神谷博多摩川流域ネットワーク副代表のコーディネートで行われた。



財務省川嶋主計官一行の源流大学視察

第10回全国源流シンポジウム(案)

「自然に抱かれ、そして感謝しながら生きる」

開催の趣旨

天川村は山岳信仰の聖地として、今なお厳しい修行が行われており、その大峯の峰々からは、清冽な水が湧き出しています。水を育む環境と培われてきた歴史と文化を再認識し、源流地域がもつ資源とその価値を広く全国に発信し、「自然に抱かれ、そして感謝しながら生きる」ことの大切さを次の世代に伝えていきたいと思います。

日時

平成21年9月12日(土)
~13日(日)

場 所: 奈良県・熊野川最源流「天川村」
会 場: 天川小学校
交流会「天川村山村開発センター」

第一日目: 12日(土曜日) 9時30分より

- ◆ 9:30 地球交響曲
「ガイアシンフォニー」上映
- ◆ 13:00 シンポジウム開会
記念講演(龍村 仁氏・映画監督)
基調提言 パネルディスカッション
天川宣言 次期開催地挨拶
全国源流の集い

第二日目: 13日(日曜日) エクスカーション

- ◆大峯山一日修行(男性) ◆洞川温泉郷名所めぐり
- ◆みたらい・川迫川溪谷探訪 ◆みたらい溪谷と天河
- 大弁財天社 ◆熊野川最源流探訪ツアー



奈良県天川村

主 催: 第10回全国源流シンポジウム実行委員会
事務局 天川村役場 地域政策課内
〒638-0392 奈良県吉野郡天川村沢谷60番地
電 話 0747-63-0321 ファクス 0747-63-0329
共 催: 天川村/全国源流の郷協議会/NPO法人全国源流ネットワーク
後 援: 国土交通省/環境省/林野庁/奈良県(予定)

「最初の一滴」

に会いに行きませんか

一多摩川源流・水干探訪の旅一

多摩川は、山梨県甲州市塩山に所在する笠取山の南懐の水干に最初の一滴を記します。大きな花崗岩からしたたり落ちた最初の一滴は、一旦地下水となり、約60m下った大きな岩の下から湧水となって流れ始め、水干沢、一ノ瀬川本谷、一ノ瀬川、丹波川、多摩川と名前を変えながら、138kmを旅して東京湾に注ぎ込みます。黄葉に彩られた秋の水干を一緒に歩きませんか。



東京大学の沖研究室の水干探訪(6月14日)

日 時 10月31日(土) 午前8時30分 奥多摩駅集合
場 所 山梨県甲州市塩山一ノ瀬高橋 水干
主 催 山梨県小菅村・多摩川源流研究所
申込先 ☎0428-87-0111 小菅村源流振興課

費 用 4,800円(バス代・弁当代・ガイド代・保険代 含む)
定 員 20名(源流ファンクラブ会員優先・先着順)
服 装 雨具、水、登山用靴、寒さ対策

日本エコミュージアム研究会 第15回 全国大会 inこすげ2009

「源流の村＝小菅村＝日本村」 ～生物文化多様性を紡ぐ～

「エコミュージアム」とは、地域の伝統的な生活や文化そのものを、体験していただく博物館のことです。エクスカーションでは、小菅村の魅力を満喫できるコースを6つ用意しました。



2009年9月5日(SAT)～6日(SUN)

開催場所 山梨県小菅村・中央公民館を拠点として村内

開催主体 日本エコミュージアム研究会・小菅村全国大会実行委員会

共催: ミューゼス研究会、小菅村の諸団体、(財)森とむらの会／植物と人々の博物館、NPO自然文化誌研究会、NPO秩父まるごと博物館など(予定)

後援: 小菅村、省庁、多摩川流域自治体、多摩川流域環境市民団体、多摩川流域企業など(予定)

【日程予定】

■ 9月5日(土)

- 12:00 受付開始 小菅村中央公民館
13:00～16:30 村内エクスカーション
①源流の景観と食体験コース
②民話七不思議コース
③森の癒し(森でほうれる)コース
④雑穀オコジュウコース
⑤多摩川源流エコツアーコース
⑥伝統工芸(竹細工)体験コース

- 16:30 小菅の湯、物産館
18:00 交流会開始
小菅村の郷土食をお楽しみください
20:30 中締め、希望者は夜なべ談義
小永田地区神代神楽見学

※参加費や交通手段に関しては、日本エコミュージアム研究会ホームページまたは下記の申込み先までお問い合わせください。

■ 9月6日(日)

- 6:15 ①野鳥観察、②河畔遊歩道散策
7:30 朝食、各宿泊施設で
9:00 ポスター・セッション 中央公民館
9:30 ワークショップ「源流の村＝小菅村＝日本村」
山村の生活、生き物、森林や水、素のままの美しい暮らしの在り様について話し合いを深めます。
12:00 閉会・昼食「謹製・こすげ弁当!!!」

＜前後・オプション企画＞

■ 9月4日(金) 午後 前泊する方は小永田神楽の花づくり体験など

■ 9月6日(日) 午後

オプション企画のエクスカーションはバスなどを使用しますので、事前申し込みにおいて希望者が多い場合にのみ実施します。

- ①奥多摩むかしみち散策(奥多摩駅解散)
②東京江戸博物館たてもん園(武蔵小金井駅解散)
③秩父まるごと博物館(秩父駅解散)

詳細に関しては、日本エコミュージアム研究会(<http://www.jecom.jp>)のホームページに順次公表していきますので、そちらをご覧ください。

申込み・問い合わせ先

- ◆植物と人々の博物館(黒澤) 電話:0428-87-0165
◆大会実行委員会事務局(亀井) 電話:0428-87-0404 FAX: 0428-87-0741
Email npo-inch@wine.plala.or.jp

この事業は、内閣府の「地方元気再生事業」の支援を受けています。

